

群馬詩人クラブ

会 報

No. 285

編集／群馬詩人クラブ幹事会
 代表／平野秀哉
 発行／群馬詩人クラブ事務局
 〒370-3102
 高崎市箕郷町生原1730
 龍昌寺
 印刷 三協印刷
 振替番号 00140-8-728969 狩野務

代表幹事として

群馬詩人クラブの新旧幹事会は平成二十五年（二〇一三）九月十五日（日）に榛名まほろばで行われた。その席で私に代表幹事をやれとの話が出た。晴天の霹靂！なんで私が。いちばんの年嵩、少し耳は遠くなったが、まだ働ける——ということだろう。しばらく考えてから代表幹事を受けることにした。

「任に応じて他に譲ることなし」こんな禅語を噛みしめながら――。

前幹事は275〜284号までとても充実した内容の群馬詩人クラブ会報を10号も出した。まずこれを見習いたい。次に群馬年刊詩集も36号となった。綿密な校正で、すばらしい詩集となった。今年も見習っていいこうと思う。総会と秋の詩祭も成功させたい。また現代詩作品

主な記事

- 総会報告 平野秀哉……………1
- 秋の司祭報告・田中 武氏 講演…2
「詩のはじめ、詩の事情」より
- 第51回 群馬県文学賞受賞……………4
「島の地図」 伊藤信一
- 萩原朔太郎研究会……………5
第43回研究例会 報告（佐伯 圭）
- 書 評……………5
中野和彦「食事の支度」志村喜代子
柳沢幸雄「影絵の街」川島 完
- 受贈誌詩御礼／年刊詩集案内……………7
- インフォメーション……………8
- 訂正とお詫び／編集後記……………8

平野秀哉

展も昨年は前橋文学館と共催で行ったが、好評だったようなので、今年も同じ方向で成功させたいと思っている。

会報283号で梁瀬和男さんが「群馬詩人クラブ回顧」を書いておられるが、群馬詩人クラブの発足は昭和三十二年（一九五九）で今年から五十七年前であり、何よりも県内詩人たちの交流の場を作り、そこで協議し行動に移すことを方針とした。次のようなテーマが思いつく。

「私たちの詩誌の主張」

「詩に関する研究発表」

「群馬年刊詩集の合評」

幹事会で発言者、司会者を決めておいて、いつも活発な意見の交換ができた友情と信頼

が自然の形で醸成されて行った。

また「会報」では郷土輩出の詩人への感想や作品鑑賞を企画してその詩的遺産の継承についても配慮した。現在の「会報」にそれらの掲載がないのが惜しまれる。

次に特記したいのは「会報」で当時の政治的社会的課題に対する会員の意見を集めたことである。

現在「日本国憲法」に関する論議が、戦後をはじめたのようになっていくが、このような重大な課題に対して、私たちが確固たる認識をもつべきであろう。そして「会報」にこのような現実的課題への、発言が必要だと私は今思っているのだが、それは詩は現実から遊離してはならないと考えるからである。

群馬詩人クラブにとっても大きな課題である。

総会報告 平野秀哉

平成25年度総会と第26回秋の詩祭は、平成25年11月23日（土・祝）に行われました。

第一部総会においては

第3号議案 平成26年度事業計画案

第4号議案 平成26年度予算案

が出されいずれも原案のまま可決されました。

主な内容は

1. 会報発行

2. 秋の詩祭



3. 現代詩作品展
4. 群馬年刊詩集発行

なお幹事の役割は次のようです。(順不同)

代表幹事

平野秀哉

事業担当

志村喜代子 高田美美

佐鳥吉美

会報担当

泉麻里 三枝治 提箸宏

年刊詩集担当

須田芳枝 篠木登志枝

会計担当

狩野務

以上、二年間よろしく申し上げます。

秋の詩祭報告

田中武氏講演「詩のはじめ、詩の事情」より

昨年十一月二十三日、前橋テルサで第二十六回群馬詩人クラブ秋の詩祭が、新潟県新発田市在住の詩人田中武氏を迎えて行われ、「詩のはじめ、詩の事情」と題し、自らの作品とその成立の事情について話されました。「茅原記」「旅程のない場所」「驟雨の食卓」「雑草屋」という四冊の詩集から選ばれた六篇の作品は、氏にとっていくつかの始まりを意味する重要な作品であり、その一つ一つと氏の詩活動とを関連付けた興味深い内容でした。

講演すべての内容をお伝えしたいところですが、紙数も限られていることから、特に興味深い、「詩のはじめ」でもある、冒頭の「物語の始まり」の部分をお伝えしたいと思います。(文責 提箸 宏)

【私の詩の書き始め】

今回の演題は「詩のはじめ、詩の事情」ということですが、まず自分の詩の書き始めのころを振り返って、それから六篇の詩の作品化した内部事情といえますか、裏話を交えてお話しさせていただきますと思います。

私の詩的出地は「ロシナンテ」という同人

誌にあります。「ロシナンテ」というのは、当時昭和二十年後半、牧野書店という出版社から出されていました「文章倶楽部」という投稿文芸誌の、詩の欄でよく入選している人たちが寄り集まって結成したグループです。ですから、私の出地は「ロシナンテ」から遡って「文章倶楽部」だと言っているのかもしれない。この「文章倶楽部」の編集長をしていたのが、今の「現代詩手帖」の創業者である小田久郎さんだったわけですね。「文章倶楽部」が「現代詩手帖」の前身だと言われているゆえんです。

私が投稿を始めたころ、「文章倶楽部」の詩の欄が、他のジャンルの欄から突出して活気づいていました。何しろ選者が、「二十億光年の孤独」で詩壇にデビューしたばかりの谷川俊太郎がいて、もう一方の相手に、当時の詩壇の中心的存在だった「荒地」グループの鮎川信夫がいて、その合評は新鮮なキャスティングでした。自分の詩の始めについて話しているんですけど、ここまでは私の詩の履歴書の表向きに書かれているようなことで、ここから先が、私の経歴の底に沈んでいる見えない詩の始めということになります。それをちょっとお話ししてみたいと思います。

「物語のはじまり」(朗読あり)

(作品「物語のはじまり」の朗読あり)

自分の書き始まりを語るにはちよどびつたりの詩なんです。私は小学校、中学校、学校の成績が良くなかったんです。四つ年上の兄がいて、家族の中では頭がよくて、あの時代に慶応大学を出たのですから…。それにくらべて、私は末っ子ですから、まあこの末っ子の出来の悪さ。でもまあちよど良かった。うちの家業である理髪業をやらせようということになりました。それにしても、この子供はやけに子供っぽい。年齢よりも幼なげで、どうも親は中学を卒業してすぐに、世間の風当てるのがちよどかわいそうに思っただけじゃないでしょうか。それで、店に見習いになるまでに三か月の猶予をくれました。その三か月が私の詩の始まりであったと今にして思います。

三ヶ月間、まるで夏休みの宿題を全くしないで、その先に何かあるかということ意識の底に押し込んで、何気なさそうにして日を過ごしている。そういうモラトリアムの感じというものは独特のもので、私はそのころから、詩のようなものをノートにつけ始めました。いたたまれないような気分を何とか紛らわせようとしていたようです。そのノートのことですけれども、どんな筆記用具を使っただかといえ、ガラスペンで書いたのですが、

インクは木の実の汁を使いました。ヒサカキという椿科の木の実なんです。しほりますとちよどブルーブラックのインクみたいな汁になりまして、それをペンにつけて書きました。なぜそんなことをやったかと言われますと子供っぽいセンチメンタルな気分だと思えますが、少なくなっていく猶予の間から何とか逃れようとして、そういう子供っぽい行為にしがみついていたのではないのでしょうか。そのノートも何十年か経ちますともうまっ茶色になって文字が消えてしまつて、今は残っていません。

この詩の中の少年は、納屋を相手にピンポンをしています。あれは本当のことなんです。

秋の詩祭



講師 田中 武氏

納屋のトタン屋根にピンポン玉を打ちあげて、ゴロゴロゴロと落ちてくるのをもう一度また、ラケットで打ち上げるといふそんなことを猶予の期間の間、人と口もきかず、日がな一日やっていたようです。

それで三か月の猶予の期間が終わりました。裏口の戸が開いて、親父が出てきました。納屋の前にいる私に、ひらひらひらつと手を振り、「おいおい、時間だぞ」という、あの声はまだ耳に残っています。それが、私の、子供の最後の日でした。

ところで、ノートのことに戻りますが、そのノートを密かに私の兄が見たらしいんです。同じ部屋に寝泊まりしていたもんですから。

ある日、兄貴の独特の角ばった文字がびっしり書かれた便箋が何枚か、ノートに挟まっていた。最初の文字が目に入りました。「弟よ、許しておくれ。お前を全くダメな奴だと思っていたけれど、おまえはこんな宝を胸に抱いていたということを今まで知らなかった。不明を許せ」というようなことが書いてありました。兄貴も若かったんでしよう、今考えると照れ臭くて読めないようなことが書いてありました。最後に、「お前はここの詩の世界を頑張つて歩いて行け。おれも負けずに、これから短歌を始めようと思う。兄弟で競い合つて文学の道を歩いて行こう」なんてことが書いてありました。あの時の驚愕と羞恥心は忘れられません。この二番目の兄は四十七歳で早死にされたのですけれど、あの手紙の一

島の地図

伊藤 信一

答案用紙の裏に島の地図をかいた

リンカクを鉛筆でまず一筆がきして

次に山地と平地を決めていく

大きく突き出した半島には

島の中央部から続く尾根の先端がかかり

その先にいくつかの小島を置いた

湾の奥まったところに河口があり

穀倉地帯が広がっている

その近くの

港になりそうな場所を

この島の首都にしよう

島に敷設する鉄道路線をかいたり消したりしているうちに

試験時間は終わってしまう

変な島が

試験のたびに生まれた

新しい担任は

夢中になって裏面に書き込みする少年に

ごく短く注意した

テスト用紙に落書きするな

島はこの世から消えた

半世紀が過ぎ

見慣れた街や野や山を今日も歩き続けながら

わら半紙にかかれた島々での生活を思い出す

寺山修司は「歴史嫌いの地理ファン」だと自称したが

この話は私にとって地理でもあるし歴史でもあるのか

一枚残らず消え失せた答案

島の地図は実在したのか

伊藤信一 略歴

- 一九六〇年 群馬県碓氷郡松井田町(現安中市松井田町)に生まれる
- 一九九〇年 詩集『ヒキ肉料理のある午後』(紙鷲社)
- 二〇〇五年 詩集『豆腐の白い闇』(紙鷲社)
- 群馬詩人クラブ会員
- 詩誌「東国」会員

萩原朔太郎研究会

第43回研究例会 報告

11月17日(日)前橋文学館において、萩原朔太郎研究会の第43回研究例会が開催された。斎木前橋文学館長の挨拶の後、那珂太郎会長に代わって昨年六月に新会長に就任された三浦雅士氏の挨拶があった。

三浦新会長は、英語が世界を席巻し、日本語を含む他の言語が減りかけていることから始め、日本の近代詩人の中で朔太郎だけが、詩の原理、言葉そのものの働きを追求した存在であること、また、人間の悲哀や喜びは言葉とともにあり、そういった人間の肝心な部分に触れているものが詩であると、話された。そして、前橋文学館と萩原朔太郎研究会との関係について、より密接な連携を促すとともに、研究会自体の活動もより活性化していきたいとの抱負を述べられた。

つづいて、栗原飛宇馬氏による研究「萩原朔太郎の〈時代〉——傍流の研究資料からの一考察」の発表があった。栗原氏は、朔太郎全集未収録の資料の紹介を通して、朔太郎と戦争ということについて考察された。

資料のひとつ「萬国太陽旗」創刊号は、旭川出身の鈴木政輝らが昭和六年に発刊したものの。朔太郎はここに、数編のアフォリズムを寄稿している。「萬国太陽旗」の、日本国家独裁の世界政府樹立を訴えるという性格上、朔太郎が戦争に対してどんな考えを持っていた

たかが問題になるが、他の資料を見ても、朔太郎が鈴木らの論に同調していたわけではないことがうかがわれ、戦争に批判的であったとも、肯定的であったとも、単純には断定できない。文学者と戦争の問題を巡っての新たな問題提起となった。

二人目の発表者は愛敬浩一氏。「萩原朔太郎／『青猫』／岡田刀水」と題して、朔太郎と岡田刀水との交流や岡田の詩への『青猫』の影響について考察された。

ご自身の近著「岡田刀水と清水房之丞」を引きながら、岡田の戦後の詩集「幻影哀歌」「灰白の蜚」について、朔太郎の『青猫』の影響抜きには語れないが、それとは別個の世界になっていると評された。そして、朔太郎という病的な部分が強調されがちだが、表現をゼロ地点まで戻し、そこから始めていることにこそ朔太郎の新しさがあるのではないかと締めくくられた。

最後に、栗原飛宇馬氏による「朔太郎の演じたマジック」を楽しみ、研究例会は閉会となった。

(報告・文責 佐伯 圭)

(ご案内)

萩原朔太郎研究会は、朔太郎やその周囲の詩人の研究者はもちろんのこと、朔太郎の詩を愛好する皆様の入会をお待ちしております。群馬詩人クラブ会員の皆様にも、会の活動へのご理解とご協力をお願いいたします。

入会申し込み・お問い合わせは前橋文学館まで。

書評

中野和彦詩集「食事の支度」

初陣を喜ぶ

志村喜代子

中野さんが、『青空』と書き『若葉』、『青い海』等と詩作すると、言葉はなにひとつ纏うものもなく、なんと直裁で明らかなのだろう。一片の曇りなく心にびつたりと添い、掬われるかのようだ。不思議なほど、言葉への信頼に裏打ちされた詩群に始まる第一詩集『食事の支度』である。それもただならぬ青春の真ん中で苦悩の自己嫌悪であり、慕情でありそれ故の怒りがある。だが「空」では、幸福感を味わうにも(バラの花の美しさに)感嘆するとき/トゲは見えない/白鳥の姿に魅せられるとき/水面下の真つ黒な部分は/見えな/会心の笑顔に/思わず笑顔誘われるとき/笑顔の投げ所を知らない/と、感嘆しながらも見ようとしない、魅せられながら見えない、知り得ようもない心奥の在りようを葛藤する作者は二連を次のように据える。

(よあけまえ/ひるさがり/たそがれ/ながいよる/あさやけ/)。それらは時の流れの様態にすぎず、在りながら確として止め置けぬもの、触れ得ようもない切なる流れなのだ。

「五月の雷」

喫茶店で

春雷を聞いた

ガラス越しに
たたきつける
大粒の雨

「全てを水に流す」

そんな事はできる筈もない
決してお前を許しはしない

雨上がりの歩道に落ちた小さな葉

輝きを増した樹々の緑に
去っていく者の瞳が映る

どちらかと言えば観念的な詩が多いと思われるが、春雷を聞いたというシチュエーションが利いていて臨場感に誘われる。「全てを水に流す」、たたきつける大粒の雨によってできよう筈もない許しもしない激情を押さえられないが、驟雨が上がれば悲しい自分を憐憫するように、小さな葉に視線を落とす。この小さな葉こそ、〈言葉を通らなければ存在に行き会えない〉地点に立っていることを証すものだ。さらに、去って行く者の瞳を樹々の緑に追う、しかも輝きを増し痛いほどの緑に――。共に実在の本質に触れるべく、初陣の喜びを祝いたい。

柳沢幸雄詩集「影絵の街」 持続する青年の詩精神

川島 完

本書の「あとがき」によれば、柳沢は詩作をはじめから43年になるとか。その間、詩集は通算19冊、個人詩誌は5誌51号を発行したと記している。まさに脇目もふらずの詩作一念の風姿に、ただただ驚愕するばかりだ。わたしはその内の4冊の詩集を見ているだけだから、何とも心許ない。同文の記述によると、第一詩集『化石』は17歳で出しているから、群馬の若手詩人を結集したという、早川聡の詩誌に柳沢が詩を発表したのは、その後のことかも知れない。ともあれ17歳の時点で、彼のベクトルは定まっていた、と思うしかない。さて、本詩集を読むと、タイトルポエムが巻頭に載っている。次の詩だ。

ほんの少しの間
影踏みばかりしていたから
いつの間にか
影に埋もれてしまった
迷子になってしまった

〔「影絵の街」一連〕

この青年の〈不条理感〉は、一定の普遍性を持つているが、柳沢の場合さらに、ある種のナルシス感も漂っている。その延長線上に詩「視線死線」はあるし、極限には「僕はマネキンに恋をする」がある。なかのフレーズ

を拾うと、〈マネキンの中に生きる／僕の心／傷つくなどと生易しい言葉では／言い表せない／通じ合えるものなど何もないけれど〉と、青年の醜酷と反芻と感傷が混濁している。

思い出せば、野口雨情の「草萌」も、佐藤春夫の「ためいき」も、宮沢賢治の「永訣の朝」も読んできた。それらはニーチェの「神は死んだ」に触れた前後で、大きな断層になった。むしろオーバーハンクといっている。モーツァルトを、始めから老成した奴と思いつつ、老人になったわたしは、何と益々ひかれていく。そんな次第で、永遠に水仙（ナルキッソス）の咲かない場があつてもいいと、思っている。だから柳沢の詩群は、わたしの古い傷に触る気もしないではない。

ところで虚実皮膜の間に、真実があるというが柳沢においては、個に徹するあまり伝動の覚束ないカム軸の感がある。それはまた以前に読んだ3冊の詩集にも、主題やモチーフに、いくつもの類型がみられるので、真実の揺るがぬ重みに垂直に切り込んで欲しいと、常々思っていた。そのところは、詩を書く誰一人免れる者はいないはずだ。つまり、比喩の適不適や巧拙を超えたところに、もうひとつの〈詩〉がある。しかし彼の終始一貫した詩精神は、思弁性よりも生理性や現実性を選ぶ強靱さがあり、それが今日まで持続した母岩になっているのだろう。この岩は少々では怯まぬだろうね。それもまた詩人さ。

(3P下段よりつづき)

件は、それ以来一度として話したことはありません。兄貴も照れくさかったんだと思います。しかし、人の視線というものは不思議な作用をするものでして、それ以来、私がノートをつける行為の意味が少し変わりました。それまで考えていなかった、他人が見るかもしれない、他人に見られるという意識が書くものを微妙に変えていきました。他人に見られてもいいという気分が起こり、それが数年後の「文章倶楽部」への投稿へと繋がって行ったような気がします。

兄貴がやったことは、比喩的に考えますと、隠されていた言葉の塊に視線を当てて、詩の卵を活性化させる引き金を引いたということになるのでしょうか。

(作品「物語の始まり」については、
会報二八四号をご参照ください。)

受贈誌誌御礼

*御恵贈感謝致します。

- | | |
|---------------|----------|
| けやき47 | けやきの会 |
| 詩集「食事の支度」 | 中野和彦 |
| 詩集「影絵の街」 | 柳沢幸雄 |
| 夜明け179 | 群馬詩人会議 |
| 萩原朔太郎、愛憐詩篇の時代 | 前橋文学館 |
| 花野29 | 大手拓次研究会 |
| SCRAMBLE 126 | 高崎現代詩の会 |
| 濫書堂通信 | 佐伯圭 |
| 「岩手詩祭」作品集 | 岩手県詩人クラブ |

第66回岩手芸術祭「文芸祭」詩の大会

入賞作品集 岩手県詩人クラブ

第一回・かなざわ現代詩コンクール

受賞作品集 石川詩人会

詩集「マボロシのふたり」 銀虫陣九

宮城の現代詩2013 宮城県詩人会

詩誌「烈風圏」26 烈風圏の会

二〇一三年刊詩集 徳島現代詩協会

岡山県詩人協会だより12

長野県詩人協会会報124

山梨県詩人協会会報13

裸心版2013.11.15 こまつかん

徳島現代詩協会会報 トンパつうしん

千葉県詩人クラブ会報224

福岡県詩人会会報157

鳥取県現代詩人協会会報

福井県詩人懇話会会報84

宮城現代詩人会会報18

日本現代詩人会会員名簿

会員名簿(日本詩人クラブ)

詩界通信 日本詩人クラブ広報篇65

長野県詩集46 長野県詩人協会

年間詩集ふくい2013 福井県詩人懇話会

香川県詩集17集 香川県詩人協会

いわての詩2013 岩手県詩人クラブ

現代詩の祭典

いのちのきずな詩のきずなやまなし2013 山梨県詩人会

かなざわ現代詩コンクール受賞作品集 石川県詩人会

季刊詩誌詩的現代7 樋口武二

視向48 矢島正

潮流詩派235 福田嵩廣

阿房芋34 福田嵩廣

季刊「榛名団」9 榛名まほろば出版

(二月八日現在 敬称略)

二〇一三年

『群馬年刊詩集第三十六集』

販売のご案内

群馬詩人クラブ刊行『群馬年刊詩集第三十六集』を次の要領で販売します。

内容

詩作品 六十八篇

追悼 栗原道子 作品「草粥」

新井穎子 作品「月のうさぎ」

文・「花さき山のおねえちゃん」

感謝をこめて

金井裕美子

早川 聰 作品「冬の道」

文・「しららしい風に抗い」

井上英明

表紙装画 狩野 務

発行

〒373-0806 群馬県太田市龍舞町五四六七

井上英明方 群馬詩人クラブ事務局

印刷

三協印刷

頒布

二〇〇〇円 会員は一〇〇〇円

いずれも郵送費は別料金となります。

※問い合わせおよび購入希望は事務局へ

ご連絡ください。

群馬詩人クラブ事務局 平野秀哉方

(☎〇二七-三七-一三四七二)

インフォメーション

会員の奥重機さんが「詩歌句フェスタ東京2013（主催 日本詩歌句協会）」で優秀作品賞を受賞されました。おめでとうございます。

高崎現代詩の会主催

第7回詩の朗読会のご案内

浅き春に詩を味わう

日時 二月二十三日(日) 午後二時～四時
場所 Cafe あすなろ 2階

〒370-0827

高崎市鞆町七三番地

☎027-384-2386

会費 無料

(但し、お一人様一品以上のオーダーを)

お問い合わせ

高崎現代詩の会 副会長 福田誠まで
〒379-0116

安中市安中三一七-七

☎& FAX 027-382-2329

*読むのは、自作詩でもそれ以外でもかまいません。もちろん聴くだけでもOKです。
*会員以外の参加、大歓迎！
*事前の申し込みは不要です。お気軽にご参加ください。お待ちしております。

訂正とお詫び

『群馬年刊詩集 第三十六集』に間違いがありました。訂正してお詫びいたします。

121頁・4行目

へたたる背よ(誤) ↓ (正) へたたる背よ

161頁・上段 最終行

平成六十年(誤) ↓ (正) 昭和六十年

166頁・上段(詩誌)内

「ライラック」発行は、7号まででした。

◆年会費納入のお願い◆

群馬詩人クラブの会費は年間三〇〇〇円です。払込の口座番号は左記です。

0014008728969 狩野 務

平成二十六年度までの会費をお支払いでない方は、同封の払込書用紙にて払込をお願いします。



編集後記

幹事の改選が行われ、三枝治、提箸宏、泉麻里の三名が会報担当となりました。三名とも会報に携わるのは初めてで、何かと行き届かない点があるかと思いますがどうぞよろしくお願ひいたします。

昨年は猛暑や竜巻、大雨、洪水等次から次へと様々な災害が日本列島を襲い、そのひとつひとつに人々の暮らしが翻弄されたように思います。

群馬はさほどひどい天災等に遭わずにすんでいます。それがさえない心穏やかな日々を送ることはなかなか難しいのではないのでしょうか。「雨にも負けず風にも負けず」「あちらこちらで人のために力を尽くし」なおかつ誹謗中傷をされても淡々と、という境地に到達するのは簡単なことではありません。それでも一輪の花、一編の詩に励まされ、慰められたことがどなたにもあると思います。言葉の力、詩の力を信じてひと時を皆様と共有できたら幸せです。

元会員で以前には幹事も務められました井田秀樹さんが、昨年11月5日 51歳でお亡くなりになりました。お会いするといつも楽しいお話で場を盛り上げてくださる方でした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。(泉)